

はじめに

2021年2月に『英語×「主体的・対話的で深い学び」—中学校・高校 新学習指導要領対応—』を出版しました。その続編として、中学校の授業の実践版としての『中学英語「主体的・対話的で深い学び」×CLIL×ICT×UDL』（以下、『中学編』）を出版しました。本書はそのまた続編の高校編となります。実は、さらにこれらとは少し異なる視点からの『英語授業「主体的・対話的で深い学び」を高めるために』も出版しました。本書で「英語授業×『主体的・対話的で深い学び』」のシリーズがお蔭様で4冊目となります。いずれも大学教育出版からです。

本書は、これまでのシリーズの書を踏襲しているところが多々あります。何と云ってもすべての読者の皆さまのすべての生徒たちが「主体的・対話的で深い学び」を楽しむことをめざして、「主体的・対話的で深い学び」などを求める学習指導要領の下で、先生方が教科書をうまく使って授業をする方法を提案するために、すぐれた実践家の高校の先生方による授業案を提示しています。変化を予見しつつ不易流行を具現して、教えることの基礎・基本をしっかりと踏まえ、鷹揚に構えて生徒たちに接していくために、より良い授業を本書では模索しています。そのために、教えることの基礎・基本を土台に、小・中・高の接続や生徒たちの躓きへの対応等を重視しつつ、CLIL（内容言語統合型学習）、ICT（情報通信技術）、UDL（学びのためのユニバーサルデザイン）、さらにPBL（プロジェクト型学習）の視点を加えて、いつの世にも色あせない本書を皆さまにお届けします。

高校での英語授業は、中学の英語授業とは地続きのはずです。だから中学校からのシームレスな学びが必要です。そのためには、中学で習熟していないということがもすればそれを補完するだけでなく、新たな学びも必要です。同様に高校入学後から卒業までの学びでも、シームレスに振り返りつつ、補充しつつ学び、より高い学びに至らなければなりません。そのためには何が必要なのでしょう。その一つの答えとして、本書があります。

本書では、授業を進めていく様々な方法をお伝えします。お伝えした先には生徒たちの「主体的・対話的で深い学び」があります。

本書を刊行するにあたり、これまでと同様に、大学教育出版は私たちの熱意をご理解くださいました。また、編集の社彩香様にはたいへんお世話になりました。ここにお礼申し上げます。

2024年10月

高橋昌由

本書をお読みいただくにあたって

引用文献及び参考文献等の明示につきまして、本書には、文部科学省著作権所有の『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 外国語編 英語編』からの引用が多数あります。書物等では、引用文献や参考文献の出典を明示するのが通例です。しかしながら、本書においては、『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 外国語編 英語編』からの引用であることが容易におわかりいただけるであろう場合は、紙幅の都合上、たいへん申し訳ありませんが、その記載を控えさせていただき、学習指導要領とのみ記載するか、そのようにさえ記載しない場合もありますので、ご了承いただきますようお願いいたします。また、同様に『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料【高等学校 外国語】は、学習評価参考資料などとさせていただきます。なお、文献やウェブサイトからの引用等につきましては、その名称等やURLを適所に記載させていただいている場合があります。

次に、用語の説明をいたします。まず、pre-, while-, post-につきまして、授業の展開で、活動の前、活動の最中、活動の後の意味で使います。学習指導要領には、「実際の活動においては、…配慮を適宜行いながら、適切な活動を展開」するとして、例えば、p. 43に「聞く前、聞いている間、聞いた後」という表記があります。同様に、「読む前、読んでいる間、読んだ後」(p. 45)、「やり取りする前、やり取りしている間、やり取りした後」(p. 48)、「発表する前、発表している間、発表した後」(p. 50)、「書く前、書いている間、書いた後」(p. 53)が見られます。次に「段落」という用語について説明いたします。これは中学校の外国語科の学習指導要領には出現しないのですが、高校の外国語科の学習指導要領には出現します（ちなみに中学校の「国語」の学習指導要領には出現しています）。高校の外国語の学習指導要領に出現する「段落」は英語ではparagraph（パラグラフ）と呼ばれる文章の集合体と筆者は捉えていて、これは、国語で使われている「段落」とは異なると理解しています。また、高校の外国語科の学習指導要領に出現する「複数の段落」は、「段落のつながりを示す語句などを取り上げ、序論・本論・結論を、豊富なモデルを活用しながら書くことができるようになるよう指導する」(p. 72)と説明があることから考えて、英語ではessay（エッセイ）と呼ばれるparagraphの集合体と捉えています。「スキーマの活性化」という用語が本書に出てくることがあります。これは、「背景知識の活性化」とも言うでしょうし、英語ではschema activationと言うでしょう。本書では、これらは同義で使用し、簡略化する際はSAと表記させていただくこともあります。最後に、語彙は「語の総体」「句」「語」と捉えてもよいと考えています。

高校英語「主体的・対話的で深い学び」× CLIL × ICT × UDL × PBL

目次

はじめに i

本書をお読みいただくにあたって ii

I

「主体的・対話的で深い学び」を達成するために

1. 本書の概要 2
2. 求められる英語授業実践の基礎・基本：学習指導要領「外国語（英語）」の基本的な考え方と授業のツボ 4
3. 「主体的・対話的で深い学び」とピア・フィードバック 6

II

求められる英語授業実践の充実のために：CLIL、ICT、UDL、PBL

CLIL、ICT、UDL、PBLとは？ なぜ必要か？ 何が必要か？ 10

III

生徒が主体的に行うミニ即興ディベート

「責任の移行モデル」で自律した学びを成立させよう 18

IV

実際の授業での展開例

1. 英語コミュニケーション I：東京書籍 Power On English Communication I
「読むこと」イ 28
2. 英語コミュニケーション I：三省堂 MY WAY English Communication I
「話すこと [やり取り]」イ 42
3. 論理・表現 I：新興出版社啓林館 Standard Vision Quest English Logic and Expression I
「話すこと [やり取り]」イ 54

4. 論理・表現Ⅰ：数研出版 EARTHRISE English Logic and Expression I Advanced	
「書くこと」ア	66
5. 英語コミュニケーションⅡ：数研出版 BIG DIPPER English Communication II	
「読むこと」イ	80
6. 論理・表現Ⅱ：三省堂 MY WAY Logic and Expression II	
「話すこと [やり取り]」イ	92
7. 英語コミュニケーションⅢ：数研出版 BLUE MARBLE English Communication III	
「聞くこと」イ	106
8. 論理・表現Ⅲ：新興出版社啓林館 Vision Quest English Logic and Expression III	
「話すこと [発表]」イ	119

V

すぐれた高校授業を実現するために

「主体的・対話的で深い学び」×CLIL×ICT×UDL×PBLの成功のカギと今後への備え…	134
参考文献	136
索引	137
執筆担当	142
執筆者紹介	143

I

「主体的・対話的で深い学び」を達成するために

1. 本書の概要

本書はⅠ～Ⅴで構成されています。Ⅰではまず本書の概要を示して、求められる英語授業実践の基礎・基本を学習指導要領の基本的な考え方と授業のツボから読み解き、「主体的・対話的で深い学び」とピア・フィードバックについてお伝えします。次にⅡでは求められる英語授業実践の充実のために、時代を拓くCLIL、ICT、UDL、及びPBLの4つの視点の必要性や重要性、さらにTIPを説きます。Ⅲでは、学習指導要領の大きな特徴がやり取りであるとの位置づけで、生徒が主体的に行うミニ即興ディベートを紹介します。

そして続くⅣでは、実際の授業での展開例を示します。学習指導要領が提示する、英語コミュニケーションⅠ、英語コミュニケーションⅡ、英語コミュニケーションⅢ、論理・表現Ⅰ、論理・表現Ⅱ、論理・表現Ⅲの教科書を、8人の高校の先生方が使ったおすすめの授業を授業案で提示をします(Stage 1)。なお、注目していただきたい大きな流れは6。本時の展開内の□で示しています。その授業提案に対して、CLIL、ICT、UDL、及びPBLの「専門家」が、授業者とインタビューを実施して、それぞれの視点からStage 1の授業提案に対して、それぞれの授業を掘り下げます(Stage 2)。それぞれの先生の授業に対するすぐれた考えが示されていて、たいへん貴重です(正直なところ、筆者自身、勉強になっています)。そして最後のStage 3では、授業案とインタビューをまとめ上げます。ここでは、まず、学習指導要領の領域別の目標や、目標に関連した言語活動を中心に、提案される授業の解説、進行、特徴等を、続いて**CLIL × ICT × UDL × PBL**として、CLIL、ICT、UDL、及びPBLのそれぞれの視点で授業案の内容やそこから考えられる様々なこと、また、紙幅の都合で本書内ではお届けできなかったインタビュー内容も活用するなどして、専門家の声を拾い上げる形でお伝えします。なお、Stage 1での科目、扱う4技能・5領域、授業提案者は下表の通りです。

1. 英語コミュニケーションⅠ	「読むこと」イ	阿部慎太郎
2. 英語コミュニケーションⅠ	「話すこと [やり取り]」イ	鈴木 啓
3. 論理・表現Ⅰ	「話すこと [やり取り]」イ	鈴木 優子
4. 論理・表現Ⅰ	「書くこと」ア	岩瀬 俊介
5. 英語コミュニケーションⅡ	「読むこと」イ	堀尾 美央
6. 論理・表現Ⅱ	「話すこと [やり取り]」イ	芹澤 和彦
7. 英語コミュニケーションⅢ	「聞くこと」イ	前田 秋輔
8. 論理・表現Ⅲ	「話すこと [発表]」イ	松山 知紘

またStage 2を担当する専門家は、CLILは谷野圭亮、ICTは米田謙三、UDLは森田琢也、PBLは藤澤佑介です。Stage 3は編著者高橋昌由が担当します。

最後にⅤでは、すぐれた授業を実現するための「主体的・対話的で深い学び」×CLIL×ICT×UDL×PBLの成功のカギと今後への備えについてお伝えします。

さて、高校の授業でも、もちろん言語活動の充実が求められています（独立行政法人教職員支援機構、2022）。これは、統合的な言語活動、授業が実際のコミュニケーションの場であること、「目的や場面、状況など」に応じた理解、表現、伝え合いが求められているということです。そのために、例えば、「読むこと」に関する授業では、和訳して終わり！であったり、英問英答でのさらりと大意把握で終わり！であったりなどは論外で、また、読んだことを単に相手に英語で説明するだけでは足りないのです。

では、どうすることが必要なのでしょう。「読んだことに関して自分で考え」、考えたことなどを相手やクラスの人みんなに伝えたり、伝えあったりするために、読み方を工夫したり「相手にわかりやすく伝えたりする工夫をする」など、活動に目的を持たせることが大切です。さらに言語活動を通して、「主体的・対話的で深い学び」の実現に繋げることも重要です。例えば、一つの答えを導くような質問だけでなく、正解がないかもしれない発問に生徒が意見や考えなどを伝えあったり、「生徒自らが問いを立てたりするような課題の工夫」が求められたりすることとなります。これらの対応の視点が、本書の推しのCLIL、ICT、UDL、及びPBLなのです。

先述の「読んだことに関して自分で考え」とは、CLILの思考が関係しますね。また、「相手にわかりやすく伝える工夫をする」の「伝える工夫」はICTに、「わかりやすく」はUDLに関係しますね。また、「生徒自らが問いを立てたりするような課題の工夫」というのはもうおわかりでしょうか、PBLに関係します。このような高校の授業で必要不可欠の情報を知っていただきたいですし、その結果、すぐれた授業を受けた高校生が主体的・対話的で深い学びをして、ストラテジー（strategy、方略）を身に付けて、力をつけてほしいと思います。このような思いで本書は書かれています。

また、これらCLIL、ICT、UDL、及びPBL以外には、大技・小技やテクニック等が必要でしょう。本書にはそれらが提示されています（もっと言わせていただければ、既刊の「英語授業×『主体的・対話的で深い学び』」のシリーズもご覧ください）。例えば、大技・小技やテクニックに関しては、上述の「読んだことを単に相手に説明する」という方法としてリテリングが本書では扱われています。その他にも、それぞれの授業案に様々なテクニック等がちりばめられていますので、全体をじっくりご覧いただきたいと思います（さらには、あまり明示していませんが方略を重視していることもおわかりいただけると思います）。

最高の授業は、最高の生徒指導であることを矜持に、いつの世にも色あせない本書を堪能していただきたいと思います。

2. 求められる英語授業実践の基礎・基本：学習指導要領「外国語（英語）」の基本的な考え方と授業のツボ

高等学校では、改訂された学習指導要領が2022年度から実施されて、今後の予測困難な時代においても生徒が様々な変化に対応しつつ、他者と協働して課題解決へと立ち向かうことが求められています。人工知能（AI）は日々進化しており、世の中は変化し続けていくことでしょう。

さて、すぐれた授業のためには、学習指導要領解説の外国語科改訂の趣旨及び要点をおさえておく必要があります。では、まず、改訂の趣旨を簡潔にして提示してみます。

- ・外国語によるコミュニケーション能力が生涯にわたり必要とされることが想定され、その能力の向上が課題となっています。
- ・小・中・高等学校で一貫した外国語教育を実施することにより、言語や文化に対する理解を深め、積極的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度や、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりする力を身に付けさせることを目標として掲げ、4技能などを総合的に育成することをねらいとして改訂されました。
- ・学年が上がるにつれて児童生徒の学習意欲に課題が生じるといった状況や、学校種間の接続が十分ではなく、進級や進学をした後に、それまでの学習内容や指導方法等を発展的に生かすことができないといった状況も見受けられました。
- ・高等学校の授業においては、依然として外国語によるコミュニケーション能力の育成を意識した取り組み、特に「話すこと」及び「書くこと」などの言語活動が適切に行われていないことや、読んだことについて意見を述べ合うなど複数の領域を結び付けた言語活動が適切に行われていないことといった課題が残っています。
- ・これらの課題を踏まえ、外国語教育を通じて育成をめざす資質・能力全体を貫く軸として、特に他者とのコミュニケーションの基盤を形成する観点を重視しつつ、他の側面からも育成をめざす資質・能力が明確となるよう整理されました。
- ・外国語の目標は、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」を働かせ、外国語による4技能の言語活動を通して情報や考えなどを的確に理解したり適切に表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図るために必要な資質・能力全体を育成することです。

次に、改訂の要点を簡潔にすると、以下のようになります。

外国語科の目標は、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの資質・能力を明確にした上で、各学校段階の学びを接続させるとともに、「外国語を使って何ができるようになるか」を明確にするという観点から改善・充実を図っています。まず、国際的な基準の導入として、CEFR（Common European Framework of Reference for Languages）を参考に、五領域別の目標を設定しています。次に、コミュニケーション能力の強化として、外国語で表現し伝え合うために、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築することを重視しています。高等学校では、中学校における学習を踏まえた上で、五領域別の言語活動及び複数の領域を結び付けた統合的な言語活動を通して、五領域を総合的に扱うことを一層重視し、更なる総合的な英語力の向上を図るように設定されています。

では、これらを踏まえての授業のツボとはどのようなものになるのでしょうか。

- ① 授業導入での文法や語句をリサイクルで活用していますか。 基礎となる文法や語句を活用するための活動を継続的に繰り返したいものです。この活動を授業の冒頭ですると、英語を使うスイッチの切り替えも兼ね、前時の既習事項を再利用し、知識及び技能を確実にすることにも繋がります。具体的には、教師がSmall Talkから入り、そしてペアワークを行います。そのペアワークで得た情報を異なるペアの相手に伝え、2技能を統合的に扱うのもよいでしょう。短時間でも漆塗りのごとく積み重ね、継続していくことが大切です。
- ② 目的・場面・状況の設定をしていますか。 何のために、どのような場面で、どのような状況でというのを設けながら、言語活動のタスクを与えておられますか。定期考査時のみ、それらを設定して評価していることを伝え聞くことがあります。当然、目的・場面・状況を考えるのは、労力も時間も要します。しかし（できる限り）、目的・場面・状況を設定して言語活動をしましょう。生徒に主体的に考えさせると面白いアイデアを提供してくれるものです。
- ③ 量は大事だけれども、一度に多くを与えていませんか。 Magical Number 7 ± 2 (Miller, 1956) を意識するのはいかがでしょうか。一般的には記憶の範囲量があるとされています。新出語句などを与えすぎていませんか。初めは7 ± 2程度に抑えつつも、それらに関連付けると一つのチャンクとなり、それが大きな単位となり、それを7 ± 2にしていけるわけです。あくまでも一つの基準として頭の片隅にでも置いてはいかがでしょうか。

上記の3点の授業のツボを取り上げてみました。先生方の授業を少しでも後押しできるきっかけになれば幸いです。

3. 「主体的・対話的で深い学び」とピア・フィードバック

「主体的・対話的で深い学び」で、自律した学び手を育てたいものです。そのために小グループでの発表後に「大切な友だち」という活動を行います。温かい対話ができる土壌を作り、相互評価ができるようにし、振り返りを主体的・対話的で深いものにします。

1. 「主体的・対話的で深い学び」を阻害するもの

気軽に匿名で発信できるSNSの影響からか、「他人を見下す」や自己コンプレックスを隠すために「他人をけなす」ことが増え、教室の雰囲気が冷たくなってはいないでしょうか。日本の英語学習には、「学習の目的が大学入試に偏っている」「EFL環境で英語を実生活で使わない」「大規模クラスのため授業規律を過度に重視する」「教師による日本語での解説と講義的な授業を好む」という課題があります。これらが生徒を「知識の受け手」とし、英語を単なる暗記科目と考えさせています。これが「主体的・対話的で深い学び」を妨げます。生徒の自己肯定感と自律性を高めるためのアプローチが必要です。それがピア・フィードバックです。

2. ピア・フィードバック

ピア・フィードバックでは、同じ学習グループのメンバーがお互いに対して評価や意見を提供し合います。コミュニケーション能力や批判的思考力を養い、協働的な学びの促進や、アウトプット活動の質の向上をめざしてピア・フィードバックを行えるようにしたいものです。生徒がお互いの学びを共有することが心地よいと思えるようになり、英語学習を通じて、生徒どうしが尊敬し、助け合える環境を作ることが、振り返りの質を高めます。

3. 「大切な友だち」

相互評価力を育成する活動として、4名程度の発表活動の後に行う「大切な友だち」(PLC便り、2012)を紹介します。英語ではcritical friendsと呼ばれています。手順は次の通りです。

- ① 発表を傾聴する：単に聞くのではなく、②～④のことができるように聴きます。興味を持ち、理解しようとする姿勢を身に付けたよい聞き手を育てます。
- ② 不確かな点を質問する：発表者の意図や考えをうやむやにしておくことは失礼です。わからない点を質問することは、敬意を表すことです。
- ③ よかった点を褒める：ただし、お世辞や思っていないことは言わないようにします。相手はそれを感じ取ってしまいます。相手の自信やモチベーションを高めます。

- ④ 質問の形で改善を示唆する：声量が小さい発表者に「大きな声を出しましょう」と言っても効果がないことが多いです。そこで、「発表した後の気持ちや理由を教えてください」と聞いて、発表方法を見直すきっかけを作ります。発表者が自分の発表について、主体的に考えることを大切にします。
- ⑤ 愛を込めたメッセージを送る：相手に感謝や尊敬の気持ちを伝えます。メッセージは短いものを本心から言います。

4. 生徒の感想

実際に「大切な友だち」を体験した生徒は上の②～④について次の感想を述べています。

- ②：「自分の中で誤解していることがあるので、それを打ち明けると、すっきりします。発表を完全理解するためにしなければならないと思いました。私は自発的に話すのが苦手なので、良い経験になりました。」
- ③：「良い点を褒めることは、相手の考えを尊重しているため、相手もより良い気持ちになり、自分自身も人の意見の良い点を見つけようとする力を養えます。」
- ④：「ストレートに言われると、否定されているように感じます。質問の形で伝えると、相手に気づきを与えられるし、関係も良くなると思います。」

5. 足りていないからこそその挑戦で社会的エージェントに

「大切な友だち」を行ってみると良い反応を得ることが多いにもかかわらず、ためらう教員は多いかもしれません。理由には、「生徒の参加意識やモチベーションが低い」「コミュニケーション能力や批判的思考力が不足している」「同じようなメンバーでは新しい視点やアイデアが出ない」と教員が思うことが挙げられます。

事前に自己肯定感を高めるアイスブレイク活動を行います。自由な発言を受け入れ、心理的安全性を高められます。アイスブレイクには、compliments（相手を見て褒め、褒められたら感謝する）、gratitude（最近起こった良いことや感謝していることを話し、聞き手は話し手に積極的に共感する）、three good things（自分について3つの良いことを言い、聞き手は肯定的に反応する）などがあります。

このような準備の上で、「大切な友だち」活動の意義を明確にし、共有します。是非、足りていないからこそ一歩踏み出しましょう。慣れてくると英語で応答もできるようになります。フィードバックを与えたり受け取ったりすることは重要なライフスキルです。自律的学習者であることから社会的エージェントであること（高橋、2021）に繋がります。

III

求められる英語授業実践の充実のために：CLIL、ICT、UDL、PBL

CLIL、ICT、UDL、PBLとは？ なぜ必要か？ 何が必要か？

1. 求められる英語授業実践の充実のためのCLIL、ICT、UDL、PBL

本書では「主体的・対話的で深い学び」を生徒が達成するために、CLIL、ICT、UDL及び『中学編』にはなかったPBLを授業実践で活用することを提案します。このⅡでは、それぞれを説明して、それらを授業実践で活用するための基礎・基本をTIP（秘訣）で提案します。

まずはCLILについての説明です。CLILとはContent and Language Integrated Learningの略語で、言語学習と教科学習をバランスよく取り入れ、学習者のコミュニケーション能力を高めることを目的として、従来のコミュニケーション重視の言語指導法（Communicative Language Teaching：CLT）と内容重視の言語指導法（Content Based Instruction：CBI）を発展させた指導方法です（笹島、2020）。CLILは言語活動を通して内容（content）の獲得と向上、及びlanguage（言語）の向上を同時にめざします。また、学習プロセスを通じて高次思考能力の育成も目標としています。CLIL授業を設計する上での中心的なフレームワークとして「4つのC（4Cs）」（Coyle、2008；Coyle et al.、2010）が挙げられます。Content（内容）、cognition（思考と学習の工夫）、communication（言語）、culture（文化の多様性の理解と対応能力）のこれらの4つのCでは、言語（母語や対象言語）を使用して思考しながら、科目内容やテーマについての知識が増強されるような授業構成モデルを示しています。教師は、教室で行う活動ではそれぞれの段階で、それぞれのCに対応した活動を行い、それを評価する必要があります。CLILの観点をもって立案された授業は、生徒は単に英語を聞いたり、読んだり、話したり、書いたりするだけでなく、英語をツールとして思考能力を高めながら他教科の知識を増強することが期待されます。

ICT（Information and Communication Technology）については、高等学校学習指導要領では「生徒が身に付けるべき資質・能力や生徒の実態、教材の内容などに応じて、視聴覚教材やコンピュータ、情報通信ネットワーク、教育機器などを有効活用し、生徒の興味・関心をより高めるとともに、英語による情報の発信に慣れさせるために、キーボードを使って英文を入力するなどの活動を効果的に取り入れることにより、指導の効率化や言語活動の更なる充実を図るようにすること」となっています。つまり具体的な例としては、「生徒がキーボード入力して、英語で書いた内容をオンラインで投稿して読み合い、意見や感想を伝え合ったりできる」「実際のニュースやレポートなど、生の外国語に触れられる」などになると考えられます。また、キーボード入力のみならず、本書では音声入力も大切であると捉えていますし、ⅣのStage 2では、機器の準備や研修の重要性をTIPとして強くお伝えしたい場合でも、これを前

提として、それ以外のTIPを提示させていただいている場合もあります。

次はUDL (Universal Design for Learning) です。「ユニバーサルデザイン」は、1980年代にロナルド・メイス氏によって提案されたすべての人のためのデザインという意味です。ユニバーサルデザインを意識した製品や建物、空間は、障壁が事前に予測され、設計段階でバリアがない状態にすることとしています。グローバル化と多様化が進む社会において、すべてのユーザーを想定した観点は、一層求められています。学校現場においても、生徒のものの見方・考え方は多様化しており、何がわかりやすいかは、生徒によって異なります。従来のように全員に同じことを求めたり、強く求めたりするのではなく、支援者となる教員が、生徒のニーズに合わせた多様な学びの選択肢を準備し、それらを適宜使いこなす柔軟性が必要です。この視点が、まさに学びのユニバーサルデザインであり、これから生きる生徒の自立に繋がります。

最後はPBLです。プロジェクト型学習 (Project-Based Learning) は探究的な学び方の一つで、主にグループで現実世界に深く関連したプロジェクトに生徒たちが取り組むことを支援する教育手法です。プロジェクトの遂行には、仲間と協力してプロジェクトの向こう側にいる相手のことを思いめぐらすこと、そしてその相手にとって価値あるものにするための試行錯誤をすること、及びプロジェクトの成果を周囲に届くように伝えるプロセスが含まれます。このような中で、白井 (2020) に示されている3つの力 (1. 新たな価値を創造する力、2. 責任ある行動をとる力、3. 対立やジレンマに対処する力) が養われていきます。PBLにおいては、プロジェクトに取り組むことを通じて、中学段階で培った英語の力をより統合的・実践的に伸ばしていく機会を得られます。これによって高校段階の目標である総合的な英語力の向上が期待されます。

2. CLIL、ICT、UDL、PBLのTIPs

CLIL、ICT、UDL及びPBLの知見を授業に活用すると多くの利点が期待できます。以下に、それぞれの専門家が基本的なTIPsを示しました。

(1) CLILのTIPs

1. 各単元で評価する言語 (language) と内容 (content) をまとめておきましょう。
2. 各学年で習熟度に合わせてどのように思考 (cognition) してどのような成果を評価するかを決めておきましょう。
3. 各学年で習熟度に合わせて言語材料やcommunication taskの難易度を調整しましょう。
4. 一つの単元で扱う内容 (content) は必ずしも1教科にのみ関連するとは限りません。環境問題や社会問題は理科科目や公民科目とも関連していることなどに意識しましょう。

5. やり取りはコミュニケーション能力（communication / culture）の重要な部分です。質問や意見交換など様々な形式のやり取りを授業へ織り込みましょう。
6. 内容理解が適切に行われるように、専門的な用語や知識が扱われるリスニング素材やリーディング素材は、導入時には、簡単な英語や場合によっては日本語で補足しましょう。
7. 特に内容（content）が難しい場合には、説明する英語が難しくなることがあるので、使用する語句や文は、生徒の既習事項と照らし合わせながら難易度を調整しましょう。
8. 発表活動の後には、その内容のまとめタスクを課すなど、指導過程では複数の領域を統合することを意識しましょう。
9. 内容（content）面について、未習か既習か、正しい内容かを、他教科の同僚などに確認しましょう。

(2) ICTのTIPs

1. 外国語科（英語）の年間指導計画をデジタル化しましょう。
2. 使用予定のデジタル教材をパソコンやタブレットなどにインストールしましょう（できるだけ実際のニュースやレポートを入れましょう）。
3. 外国語科（英語）主任やALTだけでなく、外国語教育に携わる教職員全員で協力して教材を作成しましょう（意見や感想をできるだけ伝えあう活動を入れましょう）。
4. 教材や生徒の発表データなどは教員間で保存・蓄積して、共有・再利用できるようにしましょう（生徒も自分たちでデータを保存できるようにしましょう）。
5. アナログとの併用も含め、デジタルの教材教具をどの場面でどのように使用するか（一斉・協働・個別）を計画しましょう。
6. デジタル教材を生徒が効果的に使える（一斉・協働・個別）ように計画を立てましょう（生徒の使う機器の管理なども含む）。
7. 特に自己学習用にデジタル教材を生徒が効果的に使えるように準備しましょう（動画コンテンツなど）。
8. 使用教室に実物投影機や大型提示装置等を設備して、効果的に機器を使い分けましょう。
9. 情報セキュリティや個人情報、著作権の取り扱いの指針を教職員及び生徒に示しましょう。
10. 教材や教具の有効な使い方等の情報交換を教職員どうしで、気軽に実施しましょう。
11. 「新学習指導要領に対応した外国語活動及び外国語科の授業実践事例映像資料」などを使って校内研修を定期的 to 実施しましょう（「高等学校版 新学習指導要領に対応した外国語活動及び外国語科の授業実践事例映像資料」（文部科学省）（https://www.mext.go.jp/a_

menu/kokusai/gaikokugo/1322194.htm))。

12. 児童生徒の実態に合わせて年間指導計画の見直しや修正を毎年しましょう。
13. 「ICTにふりまわされない」「いつもちょっとトラブル」の認識を共有しましょう。

*以下の資料が参考になります：

- ・文部科学省 『教員のICT活用指導力チェックリスト』（改訂版）
- ・文部科学省 『外国語の指導におけるICTの活用について』 教室やグループに1台ではなく、1人1台の端末が整備されることにより期待される4技能別のメリットが示されています。それにもとづいたTIPsは以下の通りです。

聞くこと

1. 音声の速度を変えたり、繰り返し再生したりするなどの個別の支援を児童生徒が活用することができるようにしましょう。
2. 児童生徒の興味・関心や、学んだ内容に関連のある実際の音声教材として使用することができるようにしましょう。

読むこと

3. 調べ学習等の場面で、インターネット上の多様な情報を外国語で検索したり収集したりすることができるようにしましょう。
4. 児童生徒の興味・関心や、学んだ内容に関連のある資料を教材として使用することができるようにしましょう。

話すこと

5. インターネットを利用して、児童生徒一人ひとりが遠隔地や海外の人たちと個別に会話することができるようにしましょう。
6. 外国語を話す場面を録音・録画し、活動を振り返ったり繰り返したりすることができるほか、教員が評価に活用することができるようにしましょう。

書くこと

7. ネットワーク環境を利用して児童生徒が各自作成した成果物を瞬時に共有・蓄積できるようにしましょう。
8. インターネット上の文章添削ツール等を利用することで、生徒が自分の書いたものを修正することができるようにしましょう。

全体として

9. 遠隔地や海外の学校等と交流することにより、多様な英語や異文化に触れることができるようにしましょう。
10. 電子メールやSNSを用いて、読んだり書いたりしながら、実践的なやり取りをすることができるようにしましょう。

11. ICTを活用してプレゼンテーションやディスカッションの準備をしたり、動画などを作成・共有したりすることができるようにしましょう。

(3) UDLのTIPs

〈情報の提示について〉

1. 生徒の知識、言語力、集中度合い等に依存しない資料提示を心がけましょう。
 - ・音声情報を含め、多感覚で生徒に必要な情報が効果的に伝わるような工夫

〈アウトプット活動について〉

2. 生徒の実態に合わせ、多様なアウトプットの方法を提示しましょう。
 - ・口頭発表やポスター発表、スライド利用発表等、生徒が得意なアウトプット活動を選択

〈学習計画 Planning〉

3. 育てたい生徒像を共通認識し、教科の目標を具現化しましょう。
4. 授業内容の年間計画、学期計画を立て、当該担当者と共有しましょう。
5. 目標は、短期・中期・長期に分類し、繋がりをもちましょう。

〈学習環境 Learning Environment〉

6. 校内全体の学習環境を整えましょう。
7. “すべての生徒にわかりやすく、すべての生徒が参加できる”を心がけましょう。
8. 配付するプリントのフォントや図の配置、生徒に提示する情報量を調整しましょう。

〈授業内容 Curriculum〉

9. 生徒の実態に合わせ、授業内容を精選しましょう。
10. 個の学びの尊重と協働を考え、授業を設計しましょう。

(4) PBLのTIPs

〈プロジェクトを始めるためのTIPs〉

1. 教員以外との関わりを得て、生徒が思わず本気になるような成果発表の場を設けましょう。
2. プロジェクトの中間発表やリハーサル機会を設け、試行錯誤を奨励しましょう。
3. 生徒どうして建設的な批評ができる心理的に安全な空間を作りましょう。
4. ICTは大きな味方！常に活用の可能性にアンテナを張っておきましょう。